様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月 ２５ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｈ０４４６９

研究課題名（和文）近代の城下町都市における文化的景観形成の思想と計画技術

研究課題名（英文）Philosophy and Planning Technology for Cultural Landscape Formation in Modern Castle Town

研究代表者
野中　勝利（NONAKA, Katsutoshi）

筑波大学・芸術系・教授

研究者番号：４０３０２４００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では歴史的な風致の文化的景観における継承、破壊あるいは創出を視点として空間履歴、空間利用および議論から近代都市づくりの思想と計画技術を解き明かした。
保存された天守は博物館や物産品の展示場として利用され、近代社会の都市施設として活用された。濠は次第に埋め立てられたが、公園整備における埋め立てでは反対意見が生まれ、公園整備によっては再生された。このように城址によって文化的景観の形成過程は異なった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
城下町都市を対象として、文化的景観の形成思想から近代都市づくりの文脈化の方法論を構築し、今後の都市づくりへの指針を導くことに学術的な特色がある。すなわち史的研究から計画論への展開を図ることに、本研究の独創性がある。特に同時代的な近代都市社会や市民生活と文化的景観との関係を分析することによって、市民に受け入れられる都市づくりの方法論を提示することに社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：In this study, the idea and planning technique of modern city planning were renamed from the viewpoint of the inheritance, destruction or creation of historic landscapes in the cultural landscape based on the spatial history, spatial use and discussion.
The preserved castle tower was used as a museum or product display area, and was utilized as an urban facility for modern society. The moat was gradually reclaimed. But the plan to reclaim the moat in the park improvements has generated opposition. On the other hand, there were park improvements that involved the regeneration of the moat. In this way, the formation process of the cultural landscape differed according to the castle site.

研究分野：都市計画

キーワード：都市計画　景観　城下町

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

わが国の都市の多くは近世城下町を基盤として形成された、いわゆる城下町都市である。近年では木造天守閣の復元、濠の復元や浄水化、伝統的建造物の保存や歴史的街道の景観整備など、城下町都市では城址及びその周辺への投資が進みつつある。こうした城址を中心とした城下町都市の都市づくりの取り組みは、近世城下町を基盤とする既成市街地（旧市街地）を中心としたコンパクトシティへの志向にも合致する。このような城址を中心とした既成市街地のもつ求心性や再価値化を通じた、都市づくりの計画方法論の再構築は課題になっている。

２．研究の目的

本研究はわが国固有の都市基盤である近世城下町を起源とする城下町都市の明治以降の都市づくりを文脈的に解釈し、その延長上で計画論へと応用する方法論を確立しようとする構想である。

本研究では近代における文化的景観形成の価値化と評価を視点としている。歴史的環境を基盤とした文化的景観における継承、破壊あるいは創出の観点から空間履歴、空間利用および議論から近代都市づくりの思想と計画技術を解き明かし、これからの都市づくりに正当に位置づけることを目的とする。

３．研究の方法

(1) 藩政期に建設された天守のうち現存しているのは姫路城址など 12 城址ある。この他にも明治中期以降にも残存し、昭和 20 年の空襲で焼失した天守は名古屋城址など 6 城址あり、昭和 24 年には福山（松前）城址の天守が焼失した。このように近代には 19 城址に天守が存在した。建築史などの既往研究では残存 12 天守を中心として「保存」の経過などがされているが、天守の中には一般に内部が公開され、「利用」されてきた経過は十分には明らかにされていない。内部の公開や高層階からの眺望などで市民に親しまれていたほか、展覧会等が開催されていた。文化財的な価値による「保存」のみならず、市民に開かれた「利用」の価値があった。そこで、保存されて城下町都市において果たした文化的景観の意味を、文化財や視覚的象徴性だけではなく、「利用」の視点から近代都市社会や市民生活上の文化的景観の意義を再価値化する。

(2) 城址公園は城址が有する藩政期から風致や遺構を保全するように捉えられがちであるが、果たしてその契機はどうであったのか、保全の思想はどの程度認識されていたのか、設計、整備、維持管理、そして「利用」の側面から実態的に解明する。現在の城址公園は近代において開園された当時の公園を受け継いでいることから、その初動期の状況を再価値化することが求められている。公園設計において、近代公園としてどのように城址を位置づけていたのか、すなわち風致や遺構をどのように計画条件にしていたのかを明らかにすることで近代造園における計画技術を解明する。

(3) 封建社会では近世城下町の土地利用は明確で、人々の行動には制約があった。そのため藩政期の濠や川の架橋は限定的だった。明治維新以降は、社会的、空間的な開放から新たな架橋が必要となった。さらに近代技術の発達などにより従来の木造から鉄骨造などの「永久橋」に架け替えられた。藩政期からある橋の架け替えでは、保全や継承性などの観点から賛否の議論もみられた。また位置、構造、意匠に対する議論があった。そこで架橋を含む文化的景観の創出にかかる議論からその思想と計画技術を解き明かす。

(4) 研究課題に応じた研究対象の現地に赴き、分析する史資料（当時の公文書や記録、議会議事録等の議会資料、文献、地元紙等）の確認・収集等の資料調査、地元の学芸員等へのヒアリング調査、実地の景観・眺望等の調査を行う。そして研究課題の歴史的環境基盤における文化的景観形成において、近代都市社会や市民生活との関係から、その思想や計画技術を明らかにする。

４．研究成果

(1) 藩政期から残る天守が、近代において内部が公開されたケースにおいて、当時の都市社会や市民生活上の意義を検討した。

和歌山城天守は大手門にあたる一の橋の城門とともに藩政期から残る建築的遺構だった。城門は 1909 年に腐朽のため崩壊し、天守はシロアリの被害があった。維新以降も残されたが十分な維持管理がされていなかった。その後天守は防蟻薬による対策が施された。一方、その天守では神社や個人が所蔵する甲冑、刀剣や書画などの古物が陳列されていた。その後、1901 年に和歌山県が開設した物産陳列場が狭隘になり、天守は第二陳列場として近代の産業化の一端として利用された。

(2) 弘前城天守は、1895 年に弘前公園の管理者が「美術品」を展示し、公衆の縦覧に供することを申し出て許可された。公園の開園式と同じ日に開館した。城址とともに天守を公開することで、それまで閉ざされた空間を市民に開放し、より多くの来場を促すことになった。展示品の多くは旧藩主津軽家の遺物や重臣らの武具、美術品、彫刻物などであり、城址と津軽家との

強い関係を周知、確認する場であった。

(3) 城址の「公園化」では、城址公園において城址が有する歴史的風致の取り扱いの観点から公園の設計や整備について検討した。
　明石城址では公園管理者が地元の有志、明石郡、兵庫県と変遷した。地元の有志は隅櫓の保存を目的とし公園化は手段であり、公園としての維持管理は進まなかった。明石郡の管理後、御用邸建設予定地として宮内省の管理になったが、建設はされず、兵庫県がその一部を借用して県立公園とした。兵庫県は史跡の保存や風致の保全を方針としたが、内濠の一部が埋め立てられ、風致滅失の過程を明らかにした。

(4) 和歌山城址では公園設計の中に歴史的風致の一部毀損が含まれていた（図 1)、それに対する議論が勃興した経過、また公園整備においてその毀損が回避された経過を明らかにした。すなわち本多静六による和歌山公園の設計思想の抽出、さらにその設計における風致の破壊に対する南方熊楠をはじめとする反対論とその取り組みを明らかにした。そして反対派の意向が受容され、設計を一部変更して整備された。

(5) 弘前城址は陸軍省によって管理されたが、実質的な利用はされなかった。そのため弘前市は城址を借用し、旧藩主津軽家が公園として管理した。その後、弘前市が管理することになり、1908 年の行啓、1915 年の行幸に際して公園として整備された。濠を浚渫し、多額の費用を要して旧本丸の石垣を復旧するなど、城址が有する土木的、建築的遺構の保存が明確になり、その整備は市民の衆目を集めた。

(6) 土浦城址では、他の城址同様に維新以降に濠の埋め立てが進んだ。しかし公園化の整備に伴い、埋め立てられた濠の一部を再生された経過が明らかになった。城郭固有の資産である濠を再生し、藩政期から残る櫓門と一体化した風致を復活させることになった。

(7) 近代の造園家である長岡安平が設計した千秋公園（久保田城址）と岩手公園（盛岡城址)、本多静六が設計した徳島公園（徳島城址）と和歌山公園（和歌山城址）を対象として、比較対照した相対化分析により、当初は風致を維持する設計だったが、時代を経るごとに風致を破壊する傾向にあったことを明らかにした。

(8) 同時代的な社会、経済、生活を背景として、どうしてそのような計画や事業がなされたのかを定位して、正当に評価することが必要である。すなわち同時代の都市社会や市民生活との関係からの位置づけや、前時代から受け継ぐ歴史的環境に対する位置づけなどからみた計画とその思想や理念を意味づけ、その相対的評価を積み重ねる文脈化が求められる。このような近代都市づくりの文脈化を読み取り、その成果をどのようにこれからの都市づくりに応用できるのかという文脈的方法による計画論の仮説的枠組みを提示した。

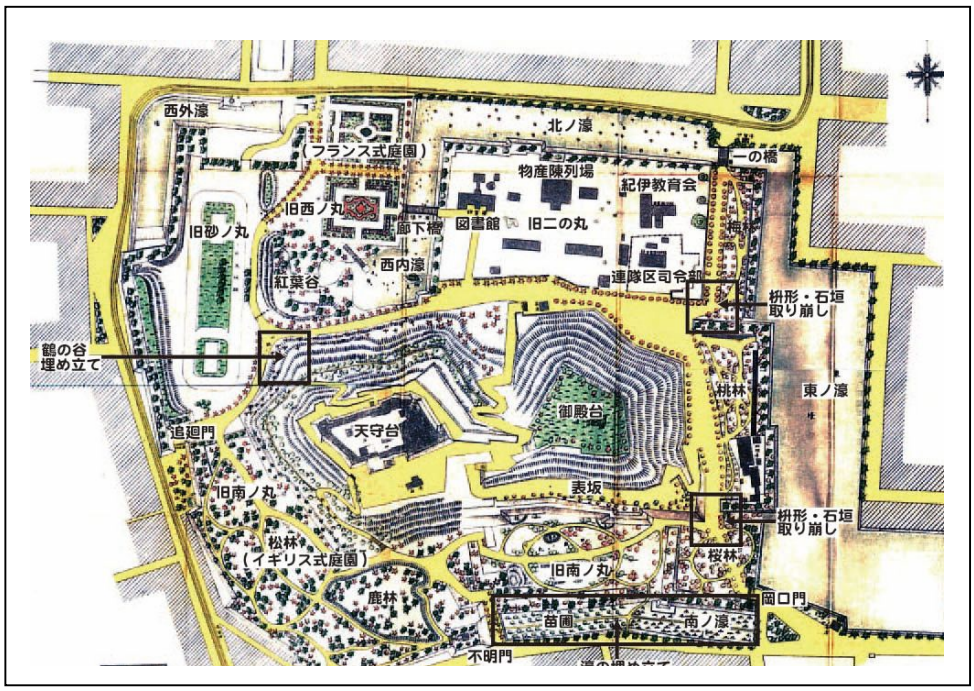

図 1　和歌山城址の公園設計における風致の毀損状況

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計14件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 野中勝利	４．巻 82-3
２．論文標題 城址公園の誕生	５．発行年 2018年
３．雑誌名 ランドスケープ研究	６．最初と最後の頁 256-259
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 野中勝利	４．巻 76
２．論文標題 大正期の和歌山公園設計と整備について	５．発行年 2018年
３．雑誌名 和歌山地方史研究	６．最初と最後の頁 3-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 野中勝利	４．巻 52-1
２．論文標題 近代の和歌山城址における風致の破壊と保存をめぐる動き	５．発行年 2017年
３．雑誌名 都市計画論文集	６．最初と最後の頁 72-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 野中勝利	４．巻 10
２．論文標題 近代の和歌山城址における和歌山県の借用による公園化と和歌山市の買収による公園化	５．発行年 2017年
３．雑誌名 ランドスケープ研究（オンライン論文集）	６．最初と最後の頁 55-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Katsutoshi Nonaka	4．巻 4
2．論文標題 Modernization in the Conversion of Castle Sites to Parks as Seen in the Park Designs of Nagaoka Yasuhei and Honda Seiroku	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Urban and Regional Planning Review	6．最初と最後の頁 211-230
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.14398/urpr.4.211	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 野中勝利	4．巻 52-2
2．論文標題 本多静六による和歌山城址の公園設計における風致の位置づけからみた評価と公園整備	5．発行年 2017年
3．雑誌名 都市計画論文集	6．最初と最後の頁 103-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野中勝利	4．巻 16
2．論文標題 弘前城址の公園化における経過と天守の位置づけ	5．発行年 2017年
3．雑誌名 都市計画報告集	6．最初と最後の頁 46-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野中勝利	4．巻 16
2．論文標題 近代の弘前公園における所有と管理の変遷及びその背景	5．発行年 2017年
3．雑誌名 都市計画報告集	6．最初と最後の頁 219-226
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野中勝利	4．巻 16
2．論文標題 近代の弘前城址における行幸啓に伴う公園整備	5．発行年 2017年
3．雑誌名 都市計画報告集	6．最初と最後の頁 227-234
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野中勝利	4．巻 80-5
2．論文標題 近代の明石城址における公園管理主体の変遷とその背景	5．発行年 2017年
3．雑誌名 ランドスケープ研究	6．最初と最後の頁 413-418
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野中勝利	4．巻 15
2．論文標題 兵庫県による御料地の公園化に対する評価と公園整備の政策的位置づけ	5．発行年 2016年
3．雑誌名 都市計画報告集	6．最初と最後の頁 168-175
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野中勝利	4．巻 15
2．論文標題 近代における兵庫県による明石公園の拡張・整備と風致の位置づけ	5．発行年 2017年
3．雑誌名 都市計画報告集	6．最初と最後の頁 216-223
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 野中勝利	４．巻 －
２．論文標題 土浦城と城址の公園化	５．発行年 2020年
３．雑誌名 第41回特別展 土浦城－時代を越えた継承の軌跡－	６．最初と最後の頁 89-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 野中勝利
２．発表標題 城址の公園化と風致、模擬天守閣と景観
３．学会等名 遺跡整備・活用研究集会（招待講演）
４．発表年 2016年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考